

就職活動で垣間見た日本企業の実態の現実 岐路に立つ日本型経営

株式会社の資金調達や組織運営を学ぶのが森田章ゼミ。法学部でありながら、経済学や商学的な知識・考察も欠かせない。就職活動での会社訪問を終え、日本経済の実態を肌で感じてきた四年生に質問をぶつける三年生……。ゼミで学ぶ会社法の視点やリーガルマインドは、実社会にどうつながっていくのだろうか？

田井 就職活動では、四年間を通して学んできた成果を十分にぶつけることができましたか？

田中 会社っていろいろは言利を基本に物事を捉えているから、自分の研究してきたテーマを話しても会社の利益につながらない事柄には、あまり興味を持ってもらえなかったというのが正直なところかな(笑)。

日笠 田中さんの研究テーマはストック・オプションでしたね？

田中 日本企業で導入しているところはまだまだ少ないけど、海外の先進的な企業では常識化しているし、日本でも採用する企業はこれから増えてくるはずなのに、実際は興味を持っている会社はまだまだ少ないです。

坂野 ある会社を訪問した時に、会社において社長というのはどういう責任を負うべき存在か？と聞かれたんです。で、僕は会社法に「社長というのは表見支配人にあたる」と書かれているの思い出して、支配人としての義務を負うと答えたところ、人事担当者はそれは違っていていいんですね。実際の会社においては社長が取締役を兼ねていることが多い、だから社長の責任というのが多い、だ

法学部
法律学科
「森田 章ゼミ」



任なんだと、間違いを指摘されました。
安松 確かにあやぶやな知識では歯がたたないですね。

日笠 僕も、さまざまな会社を回りましたが、人事の方の口から絶えず出てきたのがグローバルスタンダードという言葉です。まるで判で押したように、「わが社は、グローバルスタンダードに基づいて、国際的な評価を高めていきます」という表現をするんですね。このグローバルスタンダードというのはアングロサクソンの考え方で、当然日本とは、考え方も違えば、会社の運営の仕方も違つわけです。これを無条件で取り入れてもいいものか？ またグローバルスタンダードの根底にある弱肉強食の考え方を、日本の社会がそのまま受け入れられるのか？と疑問に思つたんです。

井上 マスコミもグローバルスタンダードとさかんに言いますが、実態はごなんですか？
田中 大企業では、年功序列を廃し、実力主義による賞金体系を取り入れるところが出てきたけれど、中小企業ではそうした会社はベンチャー企業などまだごく一部に限られているのが現実でしょう。

日笠 ただ、アメリカ的な経営を志向している企業でも、いまグローバルスタンダードを取り入れておくと五年後、十年後には業績が持ち直さず、米米のように景気的好循環がもつてく





るといふような安易な考え方がベースになっているように思いますが…。

田井 先ほどの日笠さんの発言にあったように、僕も日本の社会とアメリカの社会は根本的に違うと思つ。戦後 GHQによってアメリカの商法が日本に持ち込まれたけれど、それが日本社会に馴染まなくていくつかの弊害が生まれたという歴史を考えてみても、グロ―バルスタンダードには難しい面があると感じています。

井上 でも、今日のような国際化時代になると、規制緩和にしても、情報開示にしても、パッシングというか海外からほとんど要求が突き付けられるじゃないですか。それをクリアしながら、日本の文化風土を根拠にしたグロ―バル化を実現するというのは可能なのでしょうか？

日笠 問題の解決にあたって、森田先生はよくアメリカの大学の研究者の説を引き合いに出されますよね。その学説をそのまま使つんじゃないくて、その中でどれが日本に適用できるかを比較吟味するために。

田中 たとは「終身雇用」といふいかにも日本的な制度一つを例にとると、終身雇用をこのまま続けていけば世界の市場で他国の有力企業と対等に戦っていけないという問題意識は、経営者の中ですでにあるんだと思えます。ただステークホルダーを重視するのが日本企業の基本的なスタンスだし、みんなで仲良くやっていきましょうという共同志向が強いから、そうした意識を断ち切れない部分が多いと思つたんです。

井上 そうした日本企業の実情の中で、私たちは会社法の勉強をどう生かしているのか、私

4年次生



田中 由美子さん



坂野 嘉則さん



安松 由佳理さん



日笠 隆行さん

3年次生



井上 麻実さん



田井 雅人さん

ゼミ生諸君は、優秀な人が多く、大いに期待しています。ゼミでは、経済・社会問題を見つけ出し、これを分析し、そしてそのことについてこれまでどのような議論があったのかを学習し、しかるのちにその問題の解決方法にはどのようなものがあるのか、その中で最適のものはどうなるのかを思考します。学習するだけではなく、視点を明確にして問題を検討し、解決方法を見出すという指導者としての判断能力を身につけてもらいたいと思います。

コーポレート・ガバナンスという言葉が流行していますが、それによって何をどうしようとするのかということに問題意識の焦点をあてて欲しい。校祖新島襄は、明治において日本の近代化を考えただけでも、私たちは平成において金融制度等の近代化を考えるということになります。明治以降、日本は近代市民社会に入ったけれども、多くは官僚中心の計画経済でした。いままさに、企業の在り方について文明開化の時期ですが、「民法出て忠孝減ぶ」とならないようになって欲しいものです。



森田 章
【法学部教授】

しよつかつ

安松 会社法で学んだことを生かすんじゃないか、勉強の仕方というか方法論を生かすという

ことではないかと思えます。たとえば、アプナイといわれている銀行でも、自分がその銀行のファクトブックを取り寄せ、世情に言われているように本当に経営状況が悪いのかどうかを調べることが私たちにできるんです。

坂野 僕の場合は、ゼミで学んだことにより、森田先生の考え方に触発されて、いろんな角度からものを見られるようになったのが大きな収穫です。

日笠 確かに法律というのはさまざまなノウハウを可能にしてくれます。経営を法律論的に考えることもできれば、また判例に基づいて現在の結果から将来を考えていくこともできるんです。

田井 森田ゼミのあの自由な雰囲気は、やはり先生の人柄からくるんじゃないでしょうか？

田中 私は、森田先生の人柄に惹かれてゼミを選んだんだけど、実際のゼミに出てイメージが変わった（笑）。

坂野 そう、たとえば卒論でさステーマも枚数も自由なだけと実はその裏には、先生の期待という無言のプレッシャーがあるんですよ。

安松 先生にしてみれば、「枚数は自由だけど、それは君たち自身の自尊心の問題だ」といふことですよ。

日笠 ところで、田井君と井上さんは卒論のテーマはもう決まりましたか？

田井 僕は、まだ決まっていませんが、会社法で最近の問題になっているものをやろうと思っています。

井上 私は多少ミスターハートなところがありますが（笑）、新聞にもよく取り上げられる株主代表訴訟を取り上げようかと思ってしています。

四年次生 頑張ってください。